

「福祉文化」考 『福祉文化』の終刊に寄せて

On the "Welfare and Culture".

山崎 亮

Makoto YAMAZAKI

要旨

日本の福祉分野において、90年代以降用いられるようになった比較的新しい概念のひとつに「福祉文化」がある。その意味内容は多岐にわたるが、ここではもっぱら、2000年9月に創設された島根大学教育学部福祉文化研究会の活動とその機関誌『福祉文化』を手がかりに、「福祉文化」概念の意義と射程を考察する。さしあたって、この概念がもち得る、社会福祉士をめざす学生教育にとっての重要性と、人文・社会科学の既存の学問分野のあり方を相対化する契機としての重要性を指摘する。

キーワード：福祉文化、島根大学教育学部福祉文化研究会、
島根大学教育学部生活環境福祉課程福祉社会コース、宗教学

はじめに

島根大学教育学部福祉文化研究会の機関誌として2001年3月に創刊された『福祉文化』は、2006年12月、第5号を以て終刊を迎えた。島根大学教育学部に1999年4月に設置された生活環境福祉課程福祉社会コースの終焉⁽¹⁾とともに、本誌はその短い歴史を閉じたのであった。終刊当時、私はたまたま長期出張中であつたため最終号に寄稿することはかなわなかったが、本誌には一貫して特別な愛着を抱き続けてきた。ささやかながらこのコースの運営にタッチし、また『福祉文化』にも幾度か寄稿した経験のある者として、終刊から1年余を経た現時点で、創刊以来の経緯を回顧しつつ、この雑誌ならびに福祉文化研究会の活動に込められた「福祉文化」の意味を考えてみたい。

1. 「福祉文化」とは何か

「福祉文化」とはまた、なんと曖昧な概念であろうか。welfare ないしは well-being の訳語としての「福祉」と、culture の訳語としての「文化」はともに、それ自身で多様な含意をもつ言葉であるが、相互に異質なこれら二つの熟語の接合は、いっそうの錯綜と困惑を招くかに見える。けれども、危ういまでに曖昧なこの四文字熟語が、近年さまざま文脈で用いられるようになっていることも事実である。

たとえばこのところ、各地の自治体で、多目的ホールと福祉関係団体の事務所や福祉施設などを併設した複合施設に「福祉文化会館」という名称を冠する例が増えている⁽²⁾。あるいは、2001年3月31日付朝日新聞の「新たな福祉文化の創造を」と題した社説では、介護保険制度スタート後の1年間に現われた、地域に根ざした独自の介護の取り組みをいくつか紹介し、「介護保険を養分にして新しい福祉文化も育ってきた」と総括している。また、日本福祉大学では開学50周年を記念して2003年度から「高校生福祉文化賞エッセイコンテスト」を開催しているし、そもそも90年代後半以降、「福祉文化」を冠する大学の学科・コースも目立ちはじめ、さらにはこれを学部や大学の名称に取り入れるケースさえ現われるようになった⁽³⁾。それぞれに用いられる「福祉文化」の意味内容は多様であろうが、少なくともそこにはある種の共通する志向、すなわち従来、「福祉」という言葉が暗黙のうちに引きずってきた仄暗い、あるいは古びたイメージを払拭し、新たな建設的方向性を打ち出そうとする志向を見て取ることができるだろう。

このような「福祉文化」という言葉の使用に先鞭をつけたのは、おそらく1989年創設の福祉文化学会（現日本福祉文化学会）であったと思われる。その機関誌『福祉文化研究』創刊号（1992年）の巻頭言において、当時の学会長一番ヶ瀬康子は、「福祉の質を高めるための“福祉”の文化化と、ノーマライゼーションの理念を媒介とし、さらに高齢化社会の到来にともなう生涯学習への需要を契機として、“文化の福祉化”が注目されていった。そして、それらが統合化された概念として、“福祉文化”として実っていったのである」⁽⁴⁾と述べている。文意は必ずしも明瞭とはいえないが、これは、高齢社会の到来に伴って福祉に対する一般の関心が増大し、福祉の質の向上が叫ばれるようになるとともに、「文化の大衆化」が進行した80年代以降の日本の社会状況を反映するキーワードとして、「福祉文化」を位置づけようとする視点であろう。さらに一番ヶ瀬は、このような「福祉文化」概念の上に、福祉制度の支援対象となる「弱者」が、自己実現をめざして新たな文化を創造していくという理念をも重ね合わせている。要するに「福祉文化」のこのような用法は、福祉現場の内側からさまざまな実践や考察を積み重ねてきた立場を出発点としつつ⁽⁵⁾、従来の福祉のあり方を、単に制度的枠組みの側面で改善していくのみならず、人間性に関わってその内実を高めていこうとする志向を示すものといえる。そして、このような福祉現場から発した「福祉文化」志向が、90年代後半以降の、この言葉の一般的な使用の背景にあったと考えられるのである。

ここで注意しておきたいのは、このような「福祉文化」の用法における「文化」が、「文化の薫り高い」といった表現に示されるような、あるいは19世紀以降のドイツ語のKulturの用法に見られたような、どちらかといえば「教養」ないしは高度の精神的価値といったニュアンスを帯びている点である。これは、福祉現場の内実を内側から向上させていこうとする実践的志向からすれば当然の帰結ともいえよう。ただ、その一方で「文化(culture)」には、たとえば20世紀以降隆盛となる文化人類学の視点に典型的に見られるように、人間の生活様式全般を指す用法があるのは周知の通りである。この意味での「文化」は、「自然」に対置される人間の営みのすべての所産、さらには「人

為」といいかえてよいかもしれない。このように広義の価値中立的な「文化」概念には、逆に、制度や実践としての福祉を、それが人間の営みであるかぎりすべて包摂させることも可能であろう。

このような「文化」概念の広狭とも関わるのだが、島根大学教育学部福祉文化研究会『福祉文化』の場合、「福祉文化」という言葉の採用に関しては、上述した一般的な用法とは事情をやや異にしている。

2. 島根大学教育学部福祉文化研究会と「福祉文化」

この点を説明するためには、福祉文化研究会（2000年9月創設）の母胎となった福祉社会コースの成り立ちを一瞥するところから始めねばならない⁽⁶⁾。1997年、少子化の進展に起因する教員採用数の減少を背景とした行財政改革の一環として、当時の文部省は教員養成課程学生定員削減の方針を打ち出した。これに基づく教育学部改組の動きのなかで1999年4月に新設された生活環境福祉課程 教員免許の取得を卒業要件としない、いわゆるゼロ免課程 のなかに福祉社会コースは設置された。中四国地方の国立大学のなかでは唯一の、社会福祉士養成を目的とした定員20名のコースの誕生であった。けれども社会福祉学を専攻する教員は2名のみで、社会福祉士国家試験受験に必要な指定科目のかなりの数を非常勤講師によってまかなわねばならず、さらに学生の実習や卒論の指導についても、社会福祉学を専門としない教員の助けを借りねばならなかった。当時、教育学部では、社会科教育研究室と国語教育研究室に所属する教員の一部が学生指導のための「教室」組織を立ち上げるといふ、新たな体制を構築してこれに対応したのであった。

コース開設時のスタッフは、木村東吉（日本近現代文学）、杉崎千洋（社会福祉学：高齢者福祉、医療ソーシャルワーク）、鈴木文子（文化人類学）、竹田健二（中国古代思想史）、富澤芳亜（中国近代史）、中川政樹（政治学）、福田景道（日本古代中世文学）、槇原茂（フランス近代史）、山崎亮（宗教学）の9名（五十音順、敬称略）であり、1年後、瓦井昇（社会福祉学：地域福祉）が加わった。教育学部には幼児教育、障害児教育、家政教育、さらには臨床心理学など、社会福祉学に隣接する領域の専門家も所属していたが、種々の事情により、社会福祉学を専攻する新任の2名を除いて、それまで福祉領域にはほとんど無縁であった8名の教員が、福祉社会コースを支えることになったのである。このようないわば「ねじれ状況」のもとでは、それぞれの教員が、学生教育とそれを支えるみずからの研究の局面において、改めて何らかの形で福祉にコミットしなければならないのは、当然のなりゆきであろう。そのような福祉へのコミットメントの場として成立したのが福祉文化研究会であり、その機関誌としての『福祉文化』だったのである。

この間の事情は、『福祉文化』創刊号の「創刊の辞」の次のような決意表明にも見て取ることができる。「学生指導組織として設置された福祉社会教室は、その所属教官が

教員養成課程を兼務する形を取っているけれども、教育の内実を保障するためにもこれを共同研究組織にしなくてはならない」。このように本誌の目的は、学生教育と密接に関連した形での研究体制の確立にあった。その際、教員に共通する前提となった発想は次のようなものであった。「福祉(welfare)」が元来、人間の幸福追求、あるいはその援助の営みを指すとすれば、それは、あらゆる人文・社会科学の問題と密接に関連し得るはずである。逆にいえば、制度・実践としての福祉の背後にある、人間や社会・文化の問題に各自の専門分野からアプローチすることにより、福祉をとらえ直す新たな視角を構築することができるのではないか。そのような視角を学生教育に反映させることができれば、それは、社会福祉士をめざす学生たちにとって意義深い知見をもたらし、ひいては彼もしくは彼女に、福祉や社会の現実に臨むための深く広い視野を育むことができるはずである。そして、このような広義の福祉にかかわる多様な問題群を包括する表現として「福祉文化」という言葉が選ばれたのである。

もちろん以上のような「福祉文化」の発想は、まず以て福祉社会コースのカリキュラムに体现されており、「福祉共生」あるいは「共生社会・文化」という授業科目名のもと、福祉をみずからの専門領域に関連させた概論的授業を各教員が1、2コマ開講し、これをさらに展開させた特講と演習もそれぞれ用意されていた⁽⁷⁾。けれども、そのような授業の内実を構築していく契機とすべく、教員と学生とが交流し合いながら、それぞれ独自の「福祉文化」の視点を相互に深化させていく共通の場として、福祉文化研究会が創設されたのであった。ふたたび「創刊の辞」の言葉を引用するならば、「カリキュラム開発の意味も込めて、教官がその研究内容を発表し、それを学生と教官がともに聞く機会を持ち、併せて雑誌を出すことにした」のであった。

したがって、ここでいう「福祉文化」の発想は、福祉現場の内部から発した実践的志向に直接根ざすものではない。あるいは社会福祉学のように福祉の問題を正面から「引き受ける」ことはできないが、各々の教員が、それぞれの専門の視角から福祉に「向き合い」つつ、外在的に福祉の問題に関わろうとするのである。それは、みずからの専門分野に軸足を置いて福祉を眺めようとするという意味で、あくまで傍観者の立場にとどまらざるを得ないが、しかしそのような外在的視点からしか見えてこない福祉の側面も存在するはずである。「教養」としての狭義の「文化」と価値中立的な広義の「文化」のいずれをも視野に収めつつ、福祉の現実から一步距離を置いた「福祉文化」の発想が、福祉の現実を相対化する視点をもたらすこともあり得るだろうし、逆に、そのような発想が、各々の教員自身の従来からの専門的な視角や問題設定を相対化し、新たな展望を切り開く契機となる可能性もあるだろう。

少なくとも私の理解するところでは、おおよそこのような考え方を前提として、福祉文化研究会の活動は始められたのであった。

福祉文化研究会発表題目一覧

第1回 ('00.11.22)

山崎 亮「墓と伝統 - 隠岐島前の墓上施設をめぐる - 」

槇原 茂「19世紀フランスにおける民衆と読書」

第2回 ('01.6.6)

福田景道「物語世界と不老長寿 - 竹取の翁の決断をめぐる - 」

木村東吉「宮沢賢治の人間観の一面」

第3回 ('01.11.28)

鈴木文子「グローバリゼーションと生活世界

- 韓国離島社会の信仰観の分析を中心に - 」

杉崎千洋「社会福祉援助利用者の発見・スクリーニング

- 医療（プライマリケア）を媒介としたシステムと効果 - 」

第4回 ('02.10.30)

竹田健二「戦国楚簡 - 『性自命出』と『性情論』 - 」

中川政樹「国家のイメージについて」

第5回 ('03.6.25)

瓦井 昇「『福祉コミュニティの形成を考える』について

- 社会福祉学を研究する人のために - 」

富澤芳亜「南京国民政府期中国における財政政策決定と日中紡織資本」

第6回 ('03.11.8)

今井美絵・永江裕美・山口陽子「福祉の現場で考えること」

第7回 ('04.7.14)

高井弘弥「「うしろめたさ」の機能と構造 - 罪悪感と恥の理解の発達過程 - 」

山崎 亮「宗教と暴力 - オウム真理教事件を手がかりに - 」

第8回 ('04.10.16)

塩道素子「ユニットケアの現場から - カメさんちの取り組みと今後の課題 - 」

木村東吉「中島敦『山月記』から古井由吉『先導獣の話』へ

- 不登校問題と現代文学における「人間性」の変容について - 」

第9回 ('05.7.6)

加川充浩「災害時の要援護者見守り体制の構築とコミュニティワーク」

山本眞一「介護労働者の労働条件と労働意識」

第10回 ('05.10.23)

竹田和典「今施設で何が起きているか - ユニットケア・逆デイ・サテライト - 」

第11回 ('06.7.12)

槇原 茂「人はなぜ、いかに寄附をしたか - 近代フランスの場合 - 」

中尾寛子「訪問介護サービスを利用する独居高齢者の独居年数と閉じこもり傾向
の関連と主観的健康感に影響する社会関係要因の独居年数による相違」

第12回 ('06.10.22)

福田景道「病理と異能と文化 - 『堤中納言物語』と『今鏡』を中心として - 」

井上浩一・松崎由美「福祉の現場で考えること」

『福祉文化』掲載論文一覧

創刊号 (01.3)

「創刊の辞」

瓦井 昇「地域福祉論の分化とその理論分析」

榎原 茂「アソシエーションの力 - 19 世紀フランス農村社会の変革の一側面 - 」

富澤芳亜「史料紹介 石志学著『綿紡学』(下冊)紡織書報出版社(西安?)」

山崎 亮「死はいかにして教えられるのか - 「死への準備教育」を考える - 」

福田景道「不老長寿の意義と物語の世界 - 竹取の翁と夏山繁樹 - 」

木村東吉「日本の近現代文学に見られる老醜とその克服」

第2号 (03.2)

杉崎千洋「プライマリケアにおける社会福祉援助必要者の早期発見・スクリーニング
- 米国での基準開発事例の検討 - 」

山崎 亮「死をどうとらえるか

- 日本社会における脳死・臓器移植問題の移り行き - 」

中川政樹「20 世紀初期のイタリア理想主義者の国家観」

鈴木文子「韓国のむらで死ぬということ - 死の受容の変遷に関する覚え書き - 」

トニー・ニューマン(榎原茂、坪内香代子訳)「労働者と援助者
ワーカー ヘルパー

- イギリスにおける児童労働の過去と現在 1899 年~1999 年 - 」

公開シンポジウム「社会福祉士の今日的役割と課題

- いま、福祉の現場で問われているもの - 」

福田景道「長寿と幸福 - 『大鏡』世界の栄華をめぐって - 」

第3号 (04.2)

瓦井 昇「コミュニティワークにおける理論的な差違を理解する」

山崎 亮「死をどうとらえるか : 脳死・臓器移植問題の始点

- 和田移植前後の新聞記事を手がかりに - 」

中川政樹「ジェンティーレの思想について」

榎原 茂「地域に生きること

- D.アレヴィー『中部地方の農民を訪ねて』(1935 年)にみる農村世界 - 」

富澤芳亜「青島市档案馆(Quingdao Municipal Archives)の紹介」

竹田健二「戦国楚簡『容成氏』における身体障害者」

福田景道「幸福な結末 - 御伽草子と王朝物語 - 」

木村東吉「美しい死のために - 佐江衆一『黄落』を検討素材として - 」

第4号 木村東吉先生御退任記念号 (05.3)

山崎 亮「献呈の辞」

杉崎千洋「病院の地域連携と医療ソーシャルワーカーの組織・業務の変化

- 島根県・松江二次医療圏内 2 病院の調査から - 」

加川充浩「地域福祉活動計画策定過程における住民参加の方法と課題」

榎原 茂「旧体制期フランスにおける信仰と慈善 - コンフレリーに関するノート - 」

山崎 亮「オウム真理教事件と宗教学 - 地下鉄サリン事件の 10 年後に - 」

中川政樹「ジェンティーレへの旅」

木村東吉「『山月記』から『先導獣の話』へ

- 現代文学における「人間性」の変容に着目して - 」

第5号 (06.12)

正岡さち・早瀬裕子「認知症高齢者を抱える家族のための住宅改善に関する事例的研究」

榎原 茂「フランス人の気前よさ

- J.-L.マレ『フランスにおける寄附の歴史』(1999 年)を読む - 」

中川政樹「クローチェとジェンティーレの知的交流に関する小話」

3. 「福祉文化」研究の諸相

上述した外在的視点としての「福祉文化」の発想は、当初は、先に触れた「ねじれ状況」を打開するための苦肉の策という面がなきにしもあらずであったが、しかしながら、福祉に向き合う授業を展開し、実習指導で福祉施設を巡回しながら、この共同研究の場に参加することによって、個々の教員＝研究者のなかに、「福祉文化」研究を契機とした新たな展開が徐々に萌してきたことも事実である。このことは、左に2ページにわたって再録した福祉文化研究会での発表題目名と『福祉文化』掲載論文名を一瞥するだけでもお分かりいただけるだろう⁽⁸⁾。

まず、6年間で12回開催された福祉文化研究会では、福祉社会教室に所属する教員全員が1～2回の発表を行い、また法文学部に移設後の新任の教員(第9回、11回)や教育学部の他の研究室に所属する教員(第7回)の発表、学外からは福祉現場の最前線の報告(第10回)も行なわれた。いずれの研究会でも教員と学生が多数参加し、和気藹々とした雰囲気の中にも、異質な専門分野からのアプローチは相互に新鮮かつ刺激的で、活発な質疑応答が切り結ばれることもしばしばであった。特筆すべきは、福祉現場で活躍している卒業生による報告(第6回、8回、12回)であろう。福祉文化研究会は教育学部福祉社会コースの同窓会としての性格も併せ持っており、身近な先輩たちの貴重な体験談は、これから福祉の世界をめざそうとする在学生にとっても、またとない刺激になった。

このように多彩な研究会活動の一方で、『福祉文化』掲載論文は、福祉社会教室所属の教員による寄稿が大半を占める。そこには研究会での発表を展開させた論考もいくつか見られるが、いずれにせよ本誌は、広義の福祉にかかわる多様な問題をみずからの専門的視角から自由に論じることのできる、開かれた発表の場として機能したのだった。社会福祉学の領域のものを除くその内容は、近代フランスのコミュニティにおける自発的結社(association)や社会的結合関係(sociabilité)の問題、近代中国における労働者の福利施策、現代日本におけるデス・エデュケーションや脳死・臓器移植の問題、日本古代中世文学における長寿観と幸福観、日本近現代文学における終末期介護と尊厳死の問題、近代イタリア政治哲学者の思想、現代韓国における死生観の変容、イギリスにおける児童労働の歴史、古代中国思想における障害者像、フランス前近代の宗教的慈善運動、現代日本における宗教と暴力、現代小説を通じてみた「人間性」の変容、認知症高齢者の自宅介護に関わる住宅問題、近代フランスにおける慈善としての寄付行為等、きわめてバラエティに富んでいる。しかもそれらのテーマが、文学、社会史、経済史、思想史、文化人類学、宗教学、政治学、住居学等の多彩なアプローチによって追求されるのである。それは一見したところ統一性を欠くようにも思われるが、しかし広義の福祉が元来、人間の問題として、あるいは社会や文化の問題として存立するものである以上、このようなテーマとアプローチの多様さこそは、福祉を論ずる際に不可避のものとなるだろう。しかもこれらの論考は、テーマの選択や視点の取り方に各執筆者なりの「福祉文化」の

発想が反映されることによって、新たな方向性を切り開くことに大なり小なり成功している。その意味で『福祉文化』は、それぞれの執筆者が新たな視角を模索する実験場という性格も持ち合わせていたのである。きわめて曖昧に見えた「福祉文化」の概念は、かえってその曖昧さの故に、意外にも豊穡な可能性を秘めていた、というべきであろうか。

4. 「福祉文化」の射程

以上、福祉文化研究会の活動およびその機関誌『福祉文化』に即して「福祉文化」の発想を明らかにしてきた。もとよりそこには私の主観的なバイアスが働いている可能性もあるが、研究会に参加した人々や福祉社会教室所属の教員にも、おおよそのところでは賛同を得られるのではないかと思う。最後に、このような「福祉文化」の発想をふまえ、私自身の個人的な「福祉文化」観に触れておきたい。

第2節で見たように、「福祉文化」の発想は学生教育と密接に関連していた。社会福祉士をめざす学生に、福祉や社会の現実に臨むための深く広い視野を育むには、みずからの専門分野から何ができるのかという問いかけが、そもそものモチーフであった。ところで私の本来の専門は宗教学である。エミール・デュルケームや社会学年報学派を中心とした近代の宗教学思想研究⁽⁹⁾と日本宗教 とくに山陰地方を中心とした森神信仰や墓上施設等の伝統的な宗教民俗⁽¹⁰⁾、さらに脳死・臓器移植問題等に関わる現代日本の死生観⁽¹¹⁾も含む の研究がその主要テーマを構成している。いずれも一見したところでは「福祉文化」とは直接関連性をもたないかに思われるテーマだが、なかでも脳死・臓器移植問題を接点として関心を寄せていた生命倫理の分野⁽¹²⁾が、さしあたって「福祉文化」への通路の役割を果たしてくれた。しかしながら、福祉社会コースで開講した「比較宗教学」と「生命倫理概論」の授業はさておくとしても⁽¹³⁾、学生の卒論指導は暗中模索、試行錯誤の連続であった。まず、私が福祉社会コースで手がけた卒論題目の一覧を年度順に掲げておく。

'02	現代日本の脳死・臓器移植問題 死生観との関連で
'04	初期西田哲学における「神」の問題 『善の研究』第二編「実在」を中心に 日本社会における尊厳死について ヒュームの神観念 『自然的宗教に関する対話』を中心に
'05	日本における子どもの脳死・臓器移植 日本における優生思想の変遷 「ポックリ信仰」にみる高齢者の死生観
'06	精神障害者の自己変革 べてるの家の「当事者研究」を手がかりに 現代日本人の死生観 死に直面した人々の手記を手がかりに 障害者運動の思想 日本脳性マヒ者協会「青い芝の会」の活動を中心に

ご覧のように当初は、脳死・臓器移植問題や尊厳死などの生命倫理、あるいは宗教学に関連するテーマが大半であったが、2006年度以降多様なテーマが取り上げられるようになった。その直接の転機は、2005年度の演習で石川准・長瀬修編著『障害学への招待』（明石書店、1999年）を輪読したことにある。福祉プロパーではない私が演習のテキストとして本書を取り上げることには若干の躊躇もあったが、社会学や現代思想に不案内なゼミ生に対して我流の解説を試みながらの熟読は、私にとっても面白い作業であった。

90年代後半に登場した障害学は、従来の社会福祉や医療の枠組みからいったん自由になって、障害や障害者を、文化や社会の問題としてとらえ直そうとする新たな試みといえる。そこでは、たとえば *impairment*（障害の身体的側面）と *disability*（障害をもつことに対して社会的に生み出された不利益）との峻別や、一般社会から障害者を排除・隔離し画一的に管理・支配するシステムとして作用する施設のあり方＝全制的組織（*total institution*）といった欧米での議論も参照されているが、その源流には、日本脳性マヒ者協会「青い芝の会」を中心とした70年代以降の障害者自立運動の主張　たとえば「健常者幻想」（健常者が人間のあるべき正しい姿なのであり、障害者はそのような健常者にできるだけ近づくよう努力しなければならない）からの脱却　が位置している。このような障害学の視角は逆に、障害という切り口から現実の社会や文化を相対化していく契機を示してくれるのであり、小論で跡づけてきたわれわれの「福祉文化」の発想を、当事者側の立場に立ってさらにラディカルに展開したものと見ることもできる。

「障害者」の視点から「健常者」の社会を逆照射し相対化するこのような障害学の主張は、学生たちの卒論作成にも少なからぬ影響を与えると同時に、私にとっても大きな刺激として作用しつつある。研究会や学生教育の場面で徐々に培われてきた「福祉文化」の発想によって、すでに以前の私ならばあり得なかった構想が育ってきた　「死への準備教育」に、ある種のパターンリズムの臭いを嗅ぎ付け⁽¹⁴⁾、日本社会における脳死・臓器移植問題の経過のなかに死の概念の相対化のプロセスを読み取り⁽¹⁵⁾、脳死・臓器移植の場面に現われる「臓器として他者の身体の中かで生き永らえる」という感覚に、死生観の揺らぎを見出し⁽¹⁶⁾、老人介護施設における宗教の役割を考え⁽¹⁷⁾、オウム真理教を題材として宗教現象を暴力との関連でとらえ直す⁽¹⁸⁾　が、それはさらに新たな展開を遂げていくと思われるのである⁽¹⁹⁾。

このように「福祉文化」の発想は、演習や卒論指導といった学生との関わり合いのなかで、それ自体が常に成長していく可能性をもっている。いいかえれば、この発想に基づく教育は、既存のアカデミズムの枠組みのなかで既定の専門的な知識や技術を一方的

に伝授すれば事足りるというスタティックなそれではなく、教員も学生の目線に立ち、手探りで新たな知見を求めながら学生とともに学び続けていくダイナミックな教育なのである⁽²⁰⁾。そしてこの点にこそ、「福祉文化」の発想が、私にとって大きな意味を担い得る理由がある。それは、少なくとも私にとっては、多様な視点から現実を批判的にとらえていく柔軟な姿勢を常に養い続けてくれるはずだからである。あるいはさらに一歩進めるならば、このような「福祉文化」の柔軟な発想には、既存のアカデミズムの硬直した枠組みを突破して、人文・社会科学の新たな共同研究を立ち上げていく上での要石が埋め込まれている、とはいえないだろうか。

おわりに

教育学部に設置された福祉社会コースのことについて、いつか自分なりの総括をしておきたい、と常々思っていた。いささかぎこちない手付きではあったが、その宿題の一部をなんとか果たすことができた。福祉文化研究会と『福祉文化』は福祉社会教室所属の教員全員の努力の結晶であるが、今回一連の経緯を回顧するなかで、この研究会の活動を率先して主導された木村東吉先生の慧眼とともに、一貫して研究会の事務を粘り強く担当された榎原茂先生のためご尽力に、改めて感嘆する。お二人がおられなければ、この稀有の研究会はおそらくあり得なかつただろうし、私自身、ここに記したような新たな方向性を切り開くことは決してできなかつただろう。今さらながらの感もあるが、あらためて心からお礼申し上げたい。

註

- (1)福祉社会コースは、教員養成に特化する教育学部の再改組に伴って、2004年4月から法文学部社会文化学科に移設され、現在に至っている。2006年度は、教育学部福祉社会コースの最後の学年の卒業年度であった。
- (2)Webサイトで目についただけでも、大阪府茨木市、静岡県浜松市、岡山市、愛知県半田市、神奈川県葉山町、石川県金沢市、鳥取市等がある。
- (3)これもWebサイトで見るかぎり、城西国際大学人文学部福祉文化学科(1996年)、関西福祉大学社会福祉学部社会福祉学科福祉文化コース(1997年)、沖縄大学人文学部福祉文化学科(1999年)、京都ノートルダム大学生活福祉文化学部(2000年)、萩国際大学の山口福祉文化大学への改称(2007年)等々。
- (4)福祉文化学会『福祉文化研究』1、1992年、p.2。
- (5)たとえば、座談会「日本福祉文化学会は何をめざすのか」(『福祉文化研究』6、1997年)での一番ヶ瀬の発言によれば、60年代の神戸灘生協における「福祉文化委員会」の創設が、「福祉文化」という言葉の最初の使用例であり、それは、「従来の収容中心、救済対策的福祉ではない福祉活動」の模索のなかから生み出された言葉だったとされる。また、『福祉文化研究』所載の多彩な論考も、福祉現場からの発想に根ざしたものが多い。
- (6)この間の経緯の一端は、山崎亮「献呈の辞」(鳥根大学福祉文化研究会『福祉文化』4[木村東吉先生御退任記念号]、2005年)でも簡単に触れている。
- (7)このような「福祉文化」の発想に基づくカリキュラムは、移設された法文学部社会文化学科の福祉社会コースでも「福祉社会文化」の教育科目名のもとで継承されている。
- (8)『福祉文化』掲載論文に関しては第5号(最終号)に、その一覧が掲載されているが、

実際の論文名とは若干の齟齬がある。

- (9)山崎亮『デュルケム宗教学思想の研究』(未来社、2001年) 同「社会学年報学派の宗教学思想・序説 『社会学年報』宗教社会学セクションの構成を中心に」(『島根大学教育学部紀要(人文・社会科学)』40、2006年)。
- (10)山崎亮「荒神祭祀論のための覚書 出雲地方を念頭に置いて」(島根大学教育学部社会科教育研究室編『有馬毅一郎先生退官記念論集 社会科教育実践の新展開』、2002年) 同「墓上施設の現在 隠岐、杵岐、対馬におけるスヤをめぐる」(島根県古代文化センター『古代文化研究』13、2005年) 同「明治初期旧石見銀山領における森神信仰 数量的把握の試み」(相良英輔先生退職記念論集刊行会編『たたら製鉄・石見銀山と地域社会 近世近代の中国地方』清文堂、2008年)。
- (11)山崎亮「脳死・臓器移植問題の文化論的位相 現代日本社会における死生観の一断面」(島根大学教育学部社会科教育研究室『社会科研究』23、1998年)。
- (12)私は、教員養成課程の社会科教育研究室(現共生社会教育講座)では、哲学、倫理学、宗教学の3分野の授業を担当しているが、なかでも倫理学の授業内容は、かなり以前から生命倫理に傾斜していた。
- (13)「比較宗教学」の授業ではキリスト教、イスラム教、仏教の世界三大宗教の概略を、相互に比較しながら紹介している。周知のように、多くの福祉活動が当初は宗教的な慈善活動として始まったという歴史的経緯からして、そもそも宗教がどのようなものかを知ることは、福祉の問題を考える上でも重要である。「生命倫理概論」に関して、医療現場や生命科学の最前線で生起する倫理問題を考えることは、福祉の現場に立つ上で必須の訓練となるはずである。
- (14)山崎亮「死はいかにして教えられるのか 「死への準備教育」を考える」(島根大学教育学部福祉文化研究会『福祉文化』1、2001年)。
- (15)山崎亮「死をどうとらえるか 日本社会における脳死・臓器移植問題の移り行き」(島根大学教育学部福祉文化研究会『福祉文化』2、2003年)。
- (16)山崎亮「死をどうとらえるか : 脳死・臓器移植問題の始点 和田移植前後の新聞記事を手がかりに」(島根大学教育学部福祉文化研究会『福祉文化』3、2004年)。
- (17)山崎亮「老人介護施設における宗教の問題」(『平成15年度島根大学学長裁量経費プロジェクト報告書 老人介護施設における人材養成の現状と課題』島根大学教育学部福祉社会教室、2004年)。
- (18)山崎亮「オウム真理教事件と宗教学 地下鉄サリン事件の10年後に」(島根大学福祉文化研究会『福祉文化』4、2005年)。
- (19)現在の私の関心としては、たとえば、「青い芝の会」の中心メンバーであった横塚晃一と横田弘の障害者自立思想の宗教的背景 『歎異抄』の現代的展開の一例 と、他方で彼らと対極にある太田典礼 独自の避妊リングを考案、優生保護法の成立に尽力し、日本尊厳死協会の前身である日本安楽死協会を創設した特異な医師 の優生思想に伏在する独特の「無宗教」思想との比較検討を試みたいと考える。
- (20)卒論指導のためでなければ、おそらく決して読むことはなかったであろう書物のなかで、私がとくに刺激を受けた作品としては、次のようなものがある。80年代以降の北海道浦河町「べてるの家」における精神障害者による自立のための活動を描いた、浦河べてるの家『べてるの家の「非」援助論』(医学書院、2002年) 同『べてるの家の「当事者」研究』(医学書院、2004年)。「青い芝の会」の思想の中核を示す、横塚晃一『母よ！ 殺すな(増補版)』(すずさわ書店、1981年；復刊=生活書院、2007年) 横田弘『否定されるいのちからの問い 脳性マヒ者として生きて』(現代書館、2004年)。近年進展をみせている優生思想の歴史の再検討の作業として、米本昌平他『優生学と人間社会 生命科学の世紀はどこへ向かうのか』(講談社現代新書、2000年)。ハンセン病患者に対する差別の原点を探る、三宅一志『差別者のボクに捧げる！ - ライ患者たちの苦闘の記録 -』(晩聲社、1978年)。